

2-6 東京支社の活動記録

国際事業本部副本部長 萩原 昭
当時)東京支社副支社長

1. はじめに

3月11日の震災後、早々に災害対策本部、東京支社現地対策本部が組織化され、その中で私は当時東京支社の副支社長兼管理部長職にあり、前者では情報連絡・管理チームメンバー、後者では情報連絡・管理チームリーダー及び調達・支援チームリーダーを務めました。地震発生直後からの記憶を辿り、私の中で今でも忘れることのできない当時の出来事の状況・対応を紹介します。

2. 地震直後の混乱

地震直後、東京で生まれ育った私にとって、これほど大きな地震を体感したことが無く、東京あるいは近隣で甚大な被害が起きているに違いない、これは大変だと直感しました。TVやインターネットで、地震被害状況を目にした時には、愕然としました。

個人的には、最初に家族(妻、子供達)、次に親、兄弟等は大丈夫だろうかと携帯電話・メールで連絡しましたが、直ぐには連絡が取れず心配しましたが、その後連絡が取れ安否確認し、安心しました。特に、長男は調布から所沢まで20Km以上を徒歩で帰宅したとのことで驚きました。

一方、会社では、各フロアを見回り、ビル自体の大きな損傷が無いことから、ロッカーや備品の転倒・落下等により在席者に怪我が無いことを確認しました。さらに、休暇、外出中の職員と家族の安否確認を行うために、東京支社の各事業部幹部を招集し、在席者以外の安否確認の指示を出し、職員及びその家族の安否確認を夕方までに完了でき安心しました。しかし、出張中の職員からは、自宅に帰る交通手段が無いため、現地で交通機関が動くのを待つとのことやホテルで宿泊し交通機関の状況が進展するのを待つ、あるいは歩いて帰るとの報告があり、特に20km以上歩いて帰る職員がいたため怪我、事故の無いように気を付けるように指示しました。その夜には、一部交通機関が機能し始めましたが、TV報道と同様に会社の前の中野通りを多くの帰宅者がぞろぞろ歩い

ているのが見え、歩いて帰宅する職員もいましたが、社内には帰宅困難者が女性4名を含む35名ほどが朝を待つことになりました。防災備品が整っていない状況下でのことなので、食物、飲物入手しようにもコンビニ、スーパーでは売り切れ状態で入手困難な状況で、また仮眠する場所とは例えば、男子は各フロアのソファ、テーブル等で仮眠できるところを探してもらうようにし、女性は5F応接室または地下休養室を利用するようにしました。翌日、午前中までには交通機関も一部回復し、徒歩での帰宅者もあり、全員帰宅の途につき、私自信も会社で仮眠し、長い長い1日が終わって本当に安堵しました。

3. 東北支社支援物資の調達

地震発生の翌日、3月12日14:00~17:30に災害対策本部会議が行われ、その中で13日早朝に東北支社に向けて第1陣救援物資輸送を行うこととなりました。

これを受けて、私は物資の調達を担当(担当者は全7名程度)することになり、12日夕方から物資のリスト(水、食料、寝具、電源等の最低限必要な物)を作成し、会社周辺のスーパー、ホームセンター、コンビニ、個人商店等を手分けして駆け回りました。ところが、ペットボトル水、インスタント食品、電池、懐中電灯等は、近隣住民が買占めに走り、どこの店も売り切れ、ないしは在庫薄の状態です。入手が極めて困難な状況でした。しかし、何とか担当者一同の努力の甲斐もあって、水・ジュース・お茶(1.5L×50本)、食物(カップヌードル30個、缶詰30個等)、電池(単三200本)、懐中電灯(電池式10個)、ラジオ(電池式1個)、寝袋・布団(10セット)等をかき集めることができ、東北支社へ向けて救援物資を載せて輸送部隊を送り出すことができ、担当者一同安堵しました。

4. 東京事業所の防災物資の備蓄

3月11日の震災直後からM7～7.5以上の余震が三陸、茨城に発生する可能性があるとのことから、東京事業所ではいつ発生するか予断を許さない余震に備えた備蓄物資の調達準備を震災直後から始めました。

備蓄する物資としては、今回の地震での経験から、電気・ガス・水道が不通で最低限帰宅困難者50名が3日間生活できる食糧(飲料水2L×200本、カップヌードル300個、缶詰・カロリーメイト450個等)、機材(カセットコンロ10個、カセットボンベ60本、懐中電灯5本、携帯用充電器10個、乾電池300個、寝袋20個、毛布60枚、ブルーシート10枚、タオル150枚、非常用薬品3セット、ヘルメット50個等)を想定して調達することにしました。東京での調達は困難であることから、早急の調達に当たっては、岡山本店管理本部の小谷総務部長(当時)にご協力を頂き、また西日本の支社・支店にも連絡してもらいご協力頂きました。その結果、物資は計画以上の量が東京に届き、置き場所を確保するのに困るほどでしたが、皆さんのご協力は大変ありがたかったです。調達できた物資の中には、カセットボンベ528本(計画60本)、カップヌードル504個(計画300個)、懐中電灯34個(計画5本)、毛布137枚(計画60枚)については、計画を大幅に上回るものもありました。また、賞味期限が1ヶ月程度の生めんもあり、早々に東北支社への第3陣救援物資輸送に回し、東北支社の皆さんに食して頂きました。

5. 情報連絡・管理担当として

私は、災害対策本部、東京支社現地対策本部の組織の中で情報連絡・管理を担当しました。震災直後には様々な情報がメールにより発信者の独自の判断で関係者に配信され、受信者がさらに関係者に発信することになり、情報が錯綜し混乱を招くこととなってしまいました。そこで、本部の指導で震災に関連する全ての情報はEメールを使用(NOTESメール使用禁止)し、情報連絡・管理を担当する萩原に集約し、そこから関係者へ配信するようになりました。しかし、情報量が多すぎて短時間で処理するには困難なことから、本部、現地対策本部(東京、東北)の情報の種類と発信者/配信宛先を整理し、発信・配信をルール化し、関係者に周知徹底し運用したことにより混乱を招くことはなくなりました。しかし、対応に困った個別の報告・連絡・相談のメールも多く、これらについては引き続き対応、処理に四苦八苦せざる

を得ませんでした。

4月4日から5月16日の間には、各事業部から現地での被害調査(最終的に26調査チーム)を実施し、その窓口を情報連絡・管理の萩原が担当しました。作業としては、最初に調査チームから調査計画(調査内容、メンバー、詳細日程)を提示してもらい、それを確認し本部、現地対策本部関係者へ連絡することでした。次に、現地に入った調査メンバーから毎日の調査状況報告/現地調査結果報告をメールまたは携帯電話で受け、その日のうちに本部、現地対策本部関係者へ連絡することでした。特に、現地からの報告が来ない場合は、何かあったのではないかと心配になり携帯電話をし続け、連絡が着き次第、安否確認と状況を確認するとともに日々の報告を忘れないようお願いしました。調査チームからの現地調査結果報告は、その日の宿泊先に到着してからのとりまとめ作業を行っていたこともあり、報告が深夜に及ぶ場合もあり、それを受けてから本部、現地対策本部関係者へ連絡することも度々ありました。現地調査メンバーの方には、昼間の現地踏査で疲れ切っているにも関わらず、現地調査報告を作成し配信頂き本当にご苦労様でした。この1ヶ月半は、現地調査チームメンバーが怪我・事故、トラブルが無く、無事に会社・自宅に帰って来ることを心配し祈る日々でした。